

上武大学経営情報学部紀要
第26号, 2003年12月, 162頁~148頁
Bulletin of Faculty of
Management Information Sciences, Jobu University
Number 26, December 2003, Pages 162-148

〈論文〉

〈Paper〉

小川 洋子「妊娠カレンダー」論
On Ogawa Yoko "Pregnancy Calender"

高根沢 紀子
Takanezawa Noriko

上武大学経営情報学部 (非常勤), 〒370-1393 群馬県多野郡新町270-1
*a part-time lecturer, Faculty of Management Information Sciences, Jobu University,
Shimmachi, Gunma, 370-1393, Japan*

受付 2003年10月7日
Received 7 October 2003

抄 録

小川作品の特徴として〈曖昧さ〉はよく言われるところであるが、それゆえに〈わからない〉という評価をされてもいる。吉本ばななと共に、少女漫画的な作品を書く作家というようなレッテルを貼られ、文学研究のレベルとしては軽視されてきた。芥川賞受賞作「妊娠カレンダー」も例外ではない。〈妊娠〉を扱ったこの作品は、とくに男性評者からはくましく女でなければ理解できない〈すさまじい〉と敬遠されもした。また、姉の妊娠に向ける妹の〈目的がない純粹な悪意〉は、作家の特徴である〈曖昧さ〉で片付けられてきたが、これもまた作家の特徴に還元されて済まされてしまうものではないだろう。作品に描かれたのは《妊娠》そのものの原理であるのだ。

キーワード：小川洋子；文学；妊娠

小川洋子「妊娠カレンダー」論

高根沢 紀子

小川洋子は一九八八年「揚羽蝶が壊れる時」で第七回「海燕」新人賞を受賞しデビューした。デビュー作から文章の透明さが評価され、内容の「曖昧さ」は小川文学の特徴とされている^①が、その「曖昧さ」ゆえに「わからない」^②という評価をされてもきた。小川洋子は、第六回「海燕」新人賞を「キッチン」で受賞している吉本ばななど、同世代の女性作家として並んで評される場合も多く、「濃厚な少女漫画」^③的な作家というレッテルを貼られ、文学研究のレベルとしては軽視されてきた。一九九〇年の芥川賞受賞作「妊娠カレンダー」〔文学界〕90・9）も例外ではない。タイトルどおり《妊娠》を扱ったこの作品は、後に示すように特に男性評者からは敬遠されてきた。また、姉の妊娠に向ける妹の「目的がない純粹な悪意」^④は、作家の特徴である「曖昧さ」で片付けられてきたが、これもまた作家の特徴に還元されて済まされてしまうものではないだろう。ここではその「曖昧さ」へ「わからない」さが何に由来しているのか、「妊娠カレンダー」に描かれたものとは何だったのかについて考えていきたい。

I 評価と性差―「妊娠カレンダー」の問題

「芥川賞選評」^⑤では「今度も文章がよかった。」（河野多恵子）、「文章も感覚がよくて、ものごとを一つ一つの確に伝へてくれる。」（丸谷才一）、「透明で鋭敏な文章」（吉行淳之介）、「優れた作品は必ずよい文体を持っている。」（三浦哲郎）というように、その文章が高い評価を得た一方で、「作品はどこか透明な仄暗さを孕んでいる。そこに魅力があるのだが、同時に曖昧さの残るのも事実である。」（黒井千次）、「現実的すごたえをしのばせる工夫が、今後の展開には必要」（大江健三郎）というように、その「曖昧さ」が否定的に捉えられていた。作品の末尾に関しては、「結局、よくわからなかつた。」（丸谷）、「わからない」（吉行）とされ、選考会でも妹の「わたし」の意識の所在を巡って、読みは分れた^⑥という。これに対して小川自身は「曖昧さそのものの世界を書いた」正常か異常かという境界線のない世界の話^⑦だと述べており、その意味で「わからない」という評価はむしろ作者の意図するものであったと言える。

《妊娠》を描いたこの作品は、男性評者たちに「男の窺えぬ

空間かも知れない」と感じられ、妊娠、出産というドラマは、そして女の生理と心理の深層にはやはり男にはうかがいしれない部分がある」と、へまさしく女でなければ理解し得ない心理であり行動としか言えない」と断じられ、へすさまじい」と思われてしまうものであった。また、姉の基礎体温表についてもへ健康な人間が二十四ヵ月もの間体温を測り続けるというのは、実はいささか異様なことだ」と捉えられもした。一方、女性評者はへ誰(だれ)にでも覚えがありそうな妊娠中のちよつとした不安や食欲の振れが描かれる時、そこにたまらなくなつたかしさが生まれる」と、作品にへなつかしさを感じており、この男女の感覚の格差は興味深い。そのへなつかしさやへすさまじさはどこから生じてくるのだろうか。それは性差に還元されるもののだろうか。

とはいえ、男性評者がすべて否定的に作品を捉えていたわけではない。△いつかは妊娠をテーマに書こうと思っていました。子供を自分が生んだあともあるし……。／テーマはしいていえば、目的のない悪意。お姉さんをどうにかしようという悪意じゃない。目的がない純粋な悪意……」△という作者自身の言に引きずられてのことかもしれないが、三田誠広はインタビューにへ現代人の日常生活の背後にひそんでいる不気味なものをうまくとらえている。／女性がというよりは、人間なら誰でも持っているある種の悪意を妊娠という素材を通して描いたものだと思」△と答えている。このように女性性からは切り離れた

ところでの評価もされてはいる。しかし、赤ん坊の破壊される染色体を思いながら、へ防かび剤」にまみれているかもしれないグレイプフルーツの皮でジャムを作るへわたし」の物語を持つ「妊娠カレンダー」を、へ姉という肉親への、また、妊娠ということへの、広くいえば、新しく誕生する生命への、悪意のストーリーのようでもある」としつつも、へこの主人公(妹)には、「悪意」なぞ一つもありはしない。ただ、姉との一体感にひび割れをもたらす異物、義兄とか赤ん坊に違和感を感じて、なんとなく自己納得の演技をする可愛い女の子がいるだけだ」と論じられたように、へ純粋な悪意」どころか△「悪意」なぞ一つもないとも読まれていた。妹が姉を取られまいとして感じる小さなへ違和感」が書かれているだけなのだ、という解釈である。しかし「妊娠カレンダー」に描かれているのはそのようなへ違和感」のみで△「悪意」はないのだろうか。あるとしても、それはここに見たようにへ赤ん坊」に対するものなのであろうか。しかしそれでは△「悪意」は明確に理由もへ目的」もある△「悪意」であって、へ純粋な」ものではなくなってしまう。

II 異物と妊娠—妊娠しているのは誰か

ところで△「妊娠カレンダー」は、姉夫婦と同居している女子大生が、姉の妊娠から出産までを記録した△「観察日記」として描かれへその「観察」の視線と視点が面白い」と捉えら

れている。しかしそうであるならばタイトルは「妊娠ダイアリー」とあってもよかったところだが、「妊娠カレンダー」となっている。ペアトリス・ディディエ『日記論』¹⁶によれば、日記は「日付をうたれて、年代順に続く記述」であり、分類すれば「年代記」〈家族日誌〉「手記や手帳のたぐい」があり、日記という概念が覆う範囲は広いものである。さらに「男性の日記がふつう自己中心的傾向をもつのにたいして、女性の日記は多くの場合、つねに他人のことばかりを書くという逆説を実現している。」という特徴が指摘されている。それに照らせば、十二月二十九日から八月十一日までの日付が打たれ、そして妹から見た他人（姉）のことが多く書かれているという点で、「妊娠カレンダー」はまさに（女の書いた）《日記》であるかにも見える。しかし「妊娠カレンダー」とされた以上は「妊娠カレンダー」性が重視されるべきであろう。

七ヶ月半という期間のうち、二十一日分に及ぶこの記録は、もちろん姉の「妊娠」の記録だが、へきのう産婦人科に行ったことで、姉は正式に妊婦になった」というところから始まる記録である。もちろん病院に行く前から姉は「妊娠」しているのだから、この記録は生物学的な《妊娠》ではなく母子健康法等に基づいた制度的な《妊娠》である。

作品は、

時々三階の窓から、女の人が外を見ていることがあった。赤ん坊を生んだばかりの人だったのだろう。彼女たちはみ

んなお化粧っ気がなく、厚手のガウンを着て、髪を一つに束ねていた。耳の横で後れ毛が弱々しく揺れていた。彼女たちはだいたい無表情で、ぼんやりしていた。

という幼い頃のM病院の記憶の描写から始まり、

わたしは三階に目をやった。ネグリジェ姿の女性が遠くを見ていた。肩の曲線がガラスに映っていた。ぼらけた髪の毛が頬にかかり表情を青白い影にしていたので、それが姉なのかどうかよく分らなかった。彼女はくすんだ唇をわずかに開き、まばたきをした。涙を流す時のような、はかないまばたきだった。目を凝らしてもっとよく見ようとした時、ガラスで跳ね返った陽射しが視界をふさいでしまった。という、姉と妹二人の記憶に共通するM病院に見た妊婦が、現在の姉の姿と重なって（いるかの幻覚が示されて）小説は閉じられる。これは「妊娠」というものが、病院に始まり病院に終わることを示している。

また記述には日付とともに妊娠週数が示されている。しかし、冒頭の姉が病院に初めていく一日目、「十二月二十九日（月）」の記述には妊娠週数が示されないところにも、作品が制度的に規定された現代の《妊娠》を描いていることが意識的に表まされている。また記述の内容も次のように、常に妊娠週数を意識した胎児の成長過程を追うものとなっている。

・二月十日（火）十二週 十一日

十二週ということは、四ヶ月に入ったということだ。しか

し、姉のつわりに変化はない。

・三月十四日(土) 十六週 + 五日

五ヵ月に入ったというのに、姉のお腹は少しも目立たない。

・五月一日(金) 二十三週 + 四日

十四週間のつわりの間に減った体重五キロを、姉は十日で取り戻してしまった。

・五月二十八日(木) 二十七週 + 十三日

(…)

「今頃胎児はねえ、まぶたが上下に分れて鼻の穴が貫通している時期よ。男子なら腹腔内にあった生殖器が下降してくるの」

・七月二日(木) 三十二週 + 十三日

いつの間にか九ヵ月に入った。つわりがおさまってから、週数の進み方が速くなったように思う。

・八月八日(土) 三十七週 + 十五日

とうとう臨月に入った。

こうした、医者によって妊娠を正式に認定されたところで開始され、妊娠週数が意識された記録として、我々に当然想起されるのは「母子健康手帳」のはずである。「母子健康手帳」とは「母子保健法」にもとづいて、心身ともにすこやかな赤ちゃんを産み、育てるために、母と子を保護する目的から、国家がすべての母親に交付するもの」で、これは「妊娠の届け出とともに交付され」妊娠中は定期的な診察のときはもちろん、そ

のほかの診察のときでもかならず持参して、毎回経過を記入してもらい¹⁸⁾うものである。「妊娠中の経過」の頁には診察月日、妊娠週数、子宮底長、腹囲、血圧、浮腫、尿蛋白、尿糖、その他特に行なった検査、体重、医師の特記指示事項、施設名又は担当者名の項目がある。作品にも

「ねえ、知ってる？ 産道っていう所にも脂肪がつくのよ。だから太り過ぎると難産になるんだって」

姉はイライラしたように母子手帳を投げた。「妊娠中の経過」のページに、体重制限と赤字で書いてあるのが見えた。

「出産までに六キロくらい増えるのが理想だっていうのよ。わたし、難産になるのね、きつと」

姉はため息をつき、髪をかき上げた。彼女の体重は、もうすでに十三キロ増えているのだ。

とあり、「わたし」は散らばる「基礎体温グラフ」に「妊娠」までの経過を目にしていたように日常的に「母子手帳」を見て「妊娠」の経過を知っていく。

二十一日分という作品の記述日数は、妊婦の定期健診の時期と回数的にも一致する。¹⁸⁾月に二、三回一週間から十日ほどをおく間隔とも記述は重なってくる。その意味で「妊娠カレンダー」は「観察日記」でなく「妊娠」と「正式」に認定されてから出産するまでの週数で区切られていく「母子健康手帳」的なものである。「母子健康手帳」に現われた「妊娠」は、あら

かじめ出産予定日が示され、ある程度の〈典型〉的な経過が週数で記述されていく。「妊娠カレンダー」は限定された期間を示した、まさしく週数に従って作られた七曜表である〈カレンダー〉、曆として読まれるべきなのだ。

また、〈基礎体温グラフ〉も〈妊娠〉に至るまでの〈カレンダー〉として捉えられるのであり、事実そのグラフのおかげで、厳密に妊娠の週数が分かったとされている。そういった出産日を想定し、起こることが想定されている予定表的な展開には〈日記〉より〈カレンダー〉が連想されてくる。〈手記や手帳のたぐい〉も日記の範疇だとすれば、「母子健康手帳」も日記と捉えることは可能である。しかし日記のもっとも重要な要素は、記述されることである。例えば「妊娠カレンダー」の次に書かれた「シュガータイム」(「マリ・クレール」90・3～91・2)は〈三週間ほど前から、わたしは奇妙な日記をつけ始めた〉という文章で始まる。過食症になってしまった〈わたし〉が、毎日その日食べたものをノートに記述するということだ。「妊娠カレンダー」では、日付でくぎられている形式が日記性を感じさせてしまうとしても、この記述性という点で決定的に〈日記〉とは異なるのだ。日記が〈日付をうたれて、年代順に続く記述〉だとしたとき、「妊娠カレンダー」は〈わたし〉の視点によって進行していくが、そこに示された日付と週数は語り手によって施されたものであり、〈年代順に続く記述〉をしているのは決して〈わたし〉ではないことに注意を払うべきだろう。

このことは「母子健康手帳」で〈妊娠中の経過〉が医師(他人)の手によって記述されるものであることに重なっている。

ところで特に家庭や仕事に障害がなく、子供をもうけることを普通のことだと認識している夫婦関係においては、一般的に〈妊娠〉とは喜ぶべきこととしてとりあえずは捉えられるだろう。姉夫婦の場合の〈妊娠〉も、妹の〈わたし〉は

しかし本当に、姉と義兄の間に子供が生まれるということが、おめでたいのだろうか。わたしは辞書で『おめでと』という言葉を引いてみた。―御目出度う(感)祝いのあいさつの言葉―とあった。

「それ自体には、何の意味もないのね」
とわたしはつぶやいて、全然おめでたくない雰囲気漢字が並んだその一行を、指でなぞった。

と、その〈おめでた〉さを実感できずにいるのだが、このことは、姉夫婦の〈妊娠〉は妹の目から見て(自分は実感できない)が一般的に〈おめでた〉がるべきことであるということを示すこととなっている。

しかし姉は〈妊娠〉に対して〈特別な感慨があるように見え〉ず、〈つわりの源泉がここにあるという訳〉だと言うように、〈妊娠していることとお腹に赤ん坊がいることは、無関係であるかのように振る舞っている〉。夜中に枇杷のシャーベットの食べたいとわがままを言い出す姉は、〈(…) 求めているのはわたし自身じゃないのよ。わたしの中の『妊娠』が求めている

の。ニ・ン・シ・ンなのよ。だからどうにもできないの」と言い、『妊娠』という言葉をも、グロテスクな毛虫の名前を口にするように、気味悪そうに発音し、『今頃胎児はねえ、まぶたが上下に分れて鼻の穴が貫通している時期よ。男子なら腹腔内にあった生殖器が下降してくるの』と『自分の赤ん坊について、冷静に説明する』。また、『ここで一人勝手にどんどん膨らんでいる生物が、自分の赤ん坊だっただけで、どうしてもうまく理解できないの。抽象的で漠然として、だげど絶対的に逃げられない。』と『妊娠』をうまく理解することができず、『赤ん坊』を異物として捉えている。

このように、姉は生命を宿したことに特別の感慨もなく、作品には執拗に『妊娠』と言う事態だけが提出されていく。その意味でいえば、『赤ん坊』は姉にとって自意識をゆるがす『異物』ではないのだ。さらにこうした『妊娠』に対する違和感、『妊娠』していない妹の『わたし』もまた感じているものなのだ。

『わたし』は姉から『妊娠』を告げられた時、『ありふれた会話を交わした後のような、あっさりした感触しか残らず』『姉と義兄の間に子供が生まれるということが、おめでたいのだからか。』と疑問を持ち、『これから生まれてくる赤ん坊について、自分は何も思いを巡らしたことがないと、ふと気付いた。性別とか名前とかベビー服とかについて、わたしも考えた方がいいのかもしれない。普通はそういうことを、もっと楽しむも

なのだろう。』、『赤ん坊が手触りのあるものとは思えない。』と、うまく事態を理解することができずにいる。さらに『わたし』は、『今、自分の頭の中で赤ん坊を認識するのに使っているキーワードは『染色体』だ。『染色体』としてなら、赤ん坊の形を意識することができる。』と感じ、『この掌の向う側にもう一人人間が生きているなんて、とても信じられず、

わたしは太った姉を見ることに慣れていないので、脂肪に縁取られたたるんだ彼女の輪郭が目に入るたびに、戸惑いを感じている。姉は自分のそういう身体の変形に全く興味を払わず、ただひたすら食べているだけなので、わたしは何の口出しもできない。姉の身体が、一つの大きな腫瘍になってしまったようだ。どんどん勝手に増殖している。

と、『胎児への染色体』の『増殖』について思いを巡らせる。『どんどん勝手に増殖している』のはまぎれもなく胎児であり、胎児は喻えて言えば姉の身体にある『腫瘍』である。『わたし』にとって生まれてくる『赤ん坊』は甥／姪として認識されず、ただ物質としてある。しかも『赤ん坊』を、姉を飲み込み『増殖』しつづける『腫瘍』と捉える『わたし』は、『赤ん坊』を異物として捉えている姉と同質の存在であると言える。『妊娠』の違和感と異物感を姉と共有していく『わたし』は、これも比喩的にいえば『妊娠』した存在であるだろう。しかしそれを『わたし』は姉の身体自体を『一つの大きな腫瘍』であるとして捉えていく。『わたし』は姉という胎児（『腫瘍』）を持つ

妊婦であるのだ。¹⁹

しかし「わたし」は「妊娠」した姉と重っていくと同時に、一方で「赤ん坊」とも重なる存在である。「姉から初めて」子宮内の胎児の超音波「写真を見せられた時、凍りついた夜空に降る雨のようだと思った。(…)夜、空は深く清らかな黒色で、じっと見続けているとめまいがしそうだった。雨ははかない霧のように空を漂っていた。そしてその霧の中に、ぼっかりそのまま型の空洞が浮かんでいた。」という子宮内の描写は、「つわり」のひどい姉のために外で食事を取る場面の「庭に炊飯器や電磁調理器やコーヒーマルを持ち出し、地面にごさを敷いて食べる。夜、空を見ながら、庭で一人食事をしていると、心が安らかになる。」(傍点引用者)という情景と重なってくる。「夜、空」につつまれ「へ」においでぐるぐる巻きにされ、ベッドでうずくまっている彼女「姉、へ」のことを思いながら「へ」大きな口を開けて「チュー」と一緒に夜の闇を飲み込む「わたし」は、まさに「へ」つわり「へ」に苦しむ姉をよそにそれを栄養源として育つ「赤ん坊」である。

「わたし」は《妊婦》であると同時に《胎児》でもある。「わたし」は《妊娠》を外と内、両方から体現した存在なのだ。⁽²⁰⁾

Ⅲ 違和感と「純粹な悪意」

では「目的がない純粹な悪意」とはどのようなものなのだろうか。それは姉や、「わたし」の覚える違和感とは違うものなのだろうか。

作品の中には《異物》に対する違和感⁽²¹⁾というものが、いたるところに示されている。摂食行為もまた身体に《異物》を入れる、一種の違和感を生むものとして描かれている。姉は「つわり」によって、生きるために必要である食べ物が「へ」にかく何も食べられない。それに対して「へ」ということは、こんなにも困難な作業だったのか」と、「わたし」は「へ」しみじみ思う。姉の姿に触発されて、「わたし」は食行為そのものに違和感を覚えていく。

スーパーで食品のマネキンのバイトをする「わたし」は常に食べ物に囲まれている。そこで「わたし」は「へ」ここにある物が全部、人間の食べる物だと思いと、恐ろしく「へ」食べ物を捜すためだけに、これだけの人数の人たちが集まっていることが、不気味に思えてくる。「へ」つわり「へ」に苦しみクワッサンを少しずつ食べている時の姉の「へ」ほとんど泣いているような目元「へ」を思い浮かべる。また、「わたし」の販売するホイップクリームをその容貌とは対照的に「健康的」に食べる老婆が、それを家に帰ってからどうやって食べるのだろうか不可解に思う。

さらに、「彼の指先が、口の粘膜を何度も撫でた。わたしは

思い切り、彼の指とそのピンクの塊を噛み締めたかった。』という、義兄と初めて会った際の、歯型を取られた時の描写も、《異物》への違和感を描いたものとして捉えられる。

このように、作品は《異物》に対する違和感にあふれている。しかしその違和感が《純粋な悪意》として現われているのはなぜだろうか。

先に見たように胎児は、姉にも妹の「わたし」にも《異物》と捉えられているが、《異物》とはいったい何であろうか。「わたし」にとって義兄は、たった一人の家族である姉との間の《異物》である。しかし、子供が加わることで他人としての夫婦が家族として完成するのだとすれば、「赤ん坊」が生まれることで「わたし」は姉家族にとって《異物》となってしまうのだ。しかし「わたし」がそうなることを拒否して「姉との一体感にひび割れをもたらす異物、義兄とか赤ん坊に違和感を感じて」いるというような、姉妹を引き裂くものつまり胎児への《悪意》、として「わたし」の行動を受けとるべきではないだろう。

グレープフルーツの皮に「染色体そのものを破壊する」物質「防かび剤PWH」が含まれていることを知りながら、姉に食べさせ続ける、という「わたし」の《悪意》は、しかし、「PWHは、胎児の染色体も破壊するのかしら」と漠然と思いつくだけであったり、「この中に、PWHはどれくらい溶け込んでいるのかしら」／「わたしはジャムを見つめ、胸の奥の方

十

できさやいた。」というように、「胸の奥の方できさや」かれる程度の消極的なものである。グレープフルーツジャムを作るようになったのも、バイト先のちょっとした事故で売り物にならなくなったグレープフルーツを大量に貰うことになったという、偶然によってのものである。染色体に悪影響を与えるかもしれないという知識も、ゼミの友達に無理矢理つけられた「『地球汚染・人類汚染を考える会』で「一人隅の机から、キャンパスの中庭のポプラ並木を眺め」、上の空で聞いていた時に得たという受動的なものである。「果物売場担当の店員に、「これ、アメリカ産のグレープフルーツですか?」と確認しているあたりは、読者に《悪意》が感受される展開となっているが、現われた《悪意》というものは、この場合も自らなにかをするというような（合法的に販売されているものであるのだし）特に積極的なものではなく「曖昧」なものとしてある。

「わたし」は姉が「つわり」の時、いっさい料理を作らず、食べるときは庭で食べるほど姉に気を使い、常に姉を気遣っている。そのことを考えれば、偶然作るようになったジャムを姉が喜んで食べる、だから作るのだという「わたし」の姉に対する一貫した奉仕の態度を読むこともあるいはなされる程に、消極的で受動的な「わたし」の態度に、胎児を殺そうという程の積極的な《悪意》を読むことは難しい。また「わたし」は、その密かな《悪意》を感じながらも、なぜそのようにしてしまうのかという理由について言及することはない。

「わたし」のそれは謂わば「目的がない純粋な悪意」として作品に提出されているのだ。その「悪意」とは、消極的、偶発的にせよ、漠然と《異物》を破壊しようとしているにはちがいない。そして、その「悪意」とは何かと言えば、「妊娠」してゐる「わたし」におけるまさしく「つわり」のようなものだと考えられるのだ。

そもそも「つわり」とは「妊娠早期に妊娠のために起こる消化管症状を主徴とする(…)妊娠早期症候群」のことで、「主徴」は悪心、嘔吐、食欲不振の三つであるが、このほか頭痛、眩暈、耳鳴り、全身倦怠感、違和感、心悸亢進、不眠などの自律神経症状を伴うことが多い^②。原因はいまだ明らかになっていない。原因には諸説考えられているが、精神的なものが大きな影響を及ぼすことが指摘されている。笠井潔は『妊娠カレンダー』の姉にとって、胎児は明らかに主体としての女性を脅かす異様な他者である^③。④ことを指摘していたが、そもそも医学的にも「妊娠」という出来事はもともと他者の侵入として女に位置づけられている。「妊娠する」といながら、妊娠は決して能動的なものではなく「させられること」である。お腹が膨れるということは、自分が膨れるのではなく膨らませられるものである^⑤と考えられ、心理的に妊娠はもともと他者の侵入であると知覚されている^⑥のである。つまり「つわり」とはその侵入者である《異物》としての胎児を排除しようとしたものとして考えられてもいるのだ。

「違和」が「からだの調和がくずれること。転じて、他のものとしっくりいかないこと」という受動的なものであるのに対して、「悪意」は「他人に害を与えようとする心」(『広辞苑 第五版』)のことであり、なんらかの対象に向けられる能動的なものである。《妊娠》の違和感は「妊娠させられた」という受動的な感覚である。《妊娠》の違和感を解消するべく、違和の根源である《異物》、つまり胎児を排除しようとする能動的な営みが「つわり」なのだ。

作品は《妊娠》における違和感から《異物》を排除しようとする「つわり」の「悪意」を描いているのだ。しかしその生理的原因が明らかにされていないという意味で「悪意」は「純粋」でありえ、またそれは「曖昧」なものであるのだ。姉は「妊娠」する以前「わたしはつわりになんかならないわ」と言い、「そういう典型を嫌って」いたのだが、姉の「妊娠」はまさに「つわり」の「典型」として描かれているのだ。

ところで、齋藤美奈子の『妊娠小説』^⑦では、「妊娠小説」とは「望まない妊娠」を搭載した小説のことである^⑧と定義されていた。その定義からすれば、「妊娠カレンダー」は終始「妊娠」に関わる事柄を描いていながら『妊娠小説』ではないということになり、齋藤が言及しなかったのも当然ではある。「妊娠カレンダー」には男性の都合に翻弄される女性の《妊娠》というものは描かれてこず、「望まない妊娠」でもないから

だ。齋藤は《妊娠小説》を分類するなかで《妊娠そのもの》の探求を純粹に目ざしたものとして《純妊小説》という項目をたてていた。ここにも《望まない妊娠》という定義に基づいて「妊娠カレンダー」は含まれないのであるが、以上に見てきたように「妊娠カレンダー」こそ《純粹》に《妊娠そのもの》を《探求》した小説として定義できるはずだろう。

また齋藤は《受胎告知》を《妊娠小説》たる条件にあげており、その意味では「妊娠カレンダー」もまた《妊娠小説》の分類にあてはまるわけだが、それが、男が女につきつけられるものではなく、医師によって告げられていることによっても、「妊娠カレンダー」が他の作品とは異なる《妊娠》そのものを描いている、として他の作品と差異化することができる。『妊娠小説』執筆段階で、視野に入っていたはずの「妊娠カレンダー」がどんな形にせよ触れられないことは、「妊娠カレンダー」がそれまでの《妊娠》を扱った小説とは異なった、まさに《純粹》に《妊娠》を描いた作品であることを示しているのだ。

「妊娠カレンダー」における《妊娠》は、《きのう産婦人科に行ったこと》、《姉は正式に妊婦になった》と規定されているように、病院に行つて《妊娠》として認定され、《母子健康手帳》を貰うことで成立する。「妊娠カレンダー」は、病院で《正式に妊婦》となつてから病院で出産するまでを「母子健康手帳」的形式で描いたものであり、その《妊娠》そのものが描かれているのだ。

「妊娠カレンダー」は《そういう典型》としてのまさに《妊娠をテーマ》²⁾として描かれている。《悪意》に理由のないことも《つわり》の原因が分からないようなものとして作品にある。《純粹な悪意》とは、《妊娠をテーマ》とすることでありえたのであり、「妊娠カレンダー」は、三田の言う《人間なら誰でも持っているある種の悪意を妊娠という素材を通して描いた》ものではない。《妊娠》は決して単に《素材》ではありえなかつた。「妊娠カレンダー」はまさに《妊娠》そのものを描いた《妊娠原理小説》として読めるのだ。

それは姉の《妊娠》が「母子健康手帳」風に描かれているということにとどまらない。「母子健康手帳」は母と子のための曆であるが、この作品が《日記》として《わたし》の手によって書かれたものではないことを考えれば、二十一日分の記述にどここされた日付と週数は、《わたし》が《妊娠》(母)し、また胎児(子)としてすごした《わたし》の記録である。そのように作品は《母子健康手帳》そのものでもある。なにもドラマがないかに見えるこの作品には、姉と《わたし》という二重の様態で《妊娠》が描かれていたのである。

男性評者たちが作品に表明していた《わからない》という違和感は、決して性差に回収されるものではない。彼らの《わからない》という違和感の表明は、《わたし》がそうであったように、比喩的に言えば彼らもまた《妊娠》している、ということとを表明していることになる、という皮肉な言い方も可能だろ

う。違和感の表明はかえって逆に作品への本質的な同調を示していることになるのだ。「妊娠カレンダー」を読んだ読者に「気持ち悪かった」という感想を持つ者がいる⁽²⁸⁾のもまた、男性評者に象徴的に現われたように、作品を読むことによって読者が《妊娠》を体験させられているからだとも言えるだろう。「妊娠カレンダー」は《妊娠》そのものの原理を描いた作品なのである。

注

- (1) 「第七回「海燕」新人文芸賞選後評」(「海燕」88・11)で〈意図を観念的に書きすぎるのが難だ〉(田久保英夫)と捉えられていたのを始めとして、「国文学」(96・8)の「戦後生まれの現代作家のキーワード」で小川洋子の項目が〈曖昧〉(小林広一)であったことに象徴的に示されている。
- (2) 吉行淳之介「芥川賞選評 感想」(「文芸春秋」91・3)
- (3) 三浦雅士「夢の不安」(「海燕」90・10)
- (4) 無署名「芥川賞受賞「妊娠カレンダー」に男たちの「？」女たちの「!」」(「週刊ポスト」91・3・1)中の小川洋子の発言。
- (5) 「文芸春秋」91・3
- (6) 小川洋子(聞き手・小山鉄郎)「新芥川賞作家 特別インタビュー」『文学者追跡』特別版 小川洋子 「至福の空間」を求めて(「文学界」91・3)のなかで聞き手の小山鉄郎は、受賞決定の記者会見で、選考委員の日野啓三の選考経過の説明に〈「妊娠カレンダー」の主人公は発癌性の疑いのある防
- かび剤を使用したグレープフルーツジャムを姉にどんどん食べさせることで、最後には姉のおなかの中の赤ん坊まで破壊されていると考えるのですが、そのとき主人公はそれが自分の妄想であると自覚している、と読んだ選考委員。いや主人公は、赤ん坊が破壊されていると確信していると読んだ選考委員。〉に分かれたことをインタビューの始めの話題として紹介している。
- (7) 前掲新芥川賞作家 特別インタビュー
- (8) 田久保英夫「芥川賞選評」(「文芸春秋」91・3)
- (9) 前掲「週刊ポスト」書評
- (10) (あ)「ユニークな観察の視点「妊娠カレンダー」小川洋子著」(「週刊読売」91・4・7)
- (11) 川村湊「『妊娠カレンダー』小川洋子著 “ゆがみ” “ひずんだ”世界の恐さと懐かしさを湛えた作品」『週刊現代』91・4・6)基礎体温とは〈安静にしているときの体温〉のことをいい、〈基礎体温グラフは、ホルモン分泌の異常、排卵の有無、妊娠の早期診断、受精日の判定など〉に役立ち〈月経が不順な人、赤ちゃんがほしい人など〉(『最新 家庭の医学百科』主婦と生活社、98・6)は基礎体温を測ることが勧められているのであり、その意味では男性には〈窺えぬ空間〉であるかもしれないが、姉の行動は女性にとって〈異様なこと〉ではない。
- (12) 中沢けい「妊娠カレンダー シュガータイム なつかしさ生む受賞作」(「朝日新聞」91・4・7)
- (13) 前掲「週刊ポスト」書評
- (14) 秋山駿「●妹の悪意のストーリーだが…… 自己否定的なユーモアに欠ける主人公 小川洋子『妊娠カレンダー』」(「週刊朝日」91・3・15)

(15) 前掲「週刊読売」書評

(16) 西川長夫・後平隆共訳、松籟社、87・9・21

(17) 『四訂版 現代「家庭医学」大事典』講談社、99・12

(18) 定期健診は通常十五回前後、週数によって月に一回から三、四回受けることになっているが、へつわりの症状が強い場合、浮腫、出血、痛みなどの異常が現われた場合などには、そのつど診察を受ける必要がある(『四訂版 現代「家庭医学」大事典』)るので、通常よりやや多い二十一日という日数は姉の場合へつわりへのひどさに見合っていると考えられる。

(19) へつわりの蝶の幼虫、へ姉の赤ん坊のことを考える時、わたしはその双子の幼虫を思い浮かべる。へ胎児の染色体は順調に増殖しているのだろうか。彼女の膨らんだお腹の中で、双子の幼虫が連なっているのだろうか。へと何度も繰り返されるイメージはへ染色体の形状に由来しているのだが、この双子のイメージは姉と妹の結びつきを連想させる。へ彼女の向こう側で、庭の緑が光に打たれてぐたりしている。へ蟬の声がわたしたち二人をすっぽり包んでいる。へ「どんな赤ん坊が生まれてくるか、楽しみね」へわたしがつぶやくと、姉はほんの一瞬手を止めてゆっくりまばたきし、何も答えず食べ始める。わたしは傷ついた染色体の形について、思いを巡らせる。へという場面にも姉とへわたしのへ二人の結びつきと共にへ染色体が連想されている。だとすれば染色体破壊のイメージは胎児だけを破壊するイメージというより姉もそしてへわたしも破壊されていくイメージが浮かび上がってくる。へこの中に、PWHはどれくらい溶け込んでいくのかしらへと想像した直後にへ無色のガラスびんの中で、胎児の染色体を破壊する薬品が揺らめく連想は、へ染色体に喩えられた姉とへわたしへ自身が破壊されるイメージにも

つながっている。

(20) さらに付け加えるならば、へわたしは義兄とも重なって存在である。義兄のつまらなさをことさら強調するへわたしだが、へ基礎体温グラフを病院に持っていきべきかどうか悩む姉にへ考えすぎよ。基礎体温表なんて、ただの資料じゃないのへと言ひ、へつわりへに苦しむ姉にへバカみたいだなんて、自分を責めない方がいいと思うよ。姉さんが悪いわけじゃないんだからへとなぐさめる。それはへいつものことながら当たり障りのない意見を述べ、義兄と同質の態度である。また義兄は育児本を買ってきたり、戌の日の説明をしたりする。姉はそれらに興味を示しているように見え、へわたしもよく理解できない。姉妹は早くに両親をなくしている。義兄や、正月にはおせち料理を、戌の日にはお祝いを持参する義兄の両親の存在は、へ妊娠を理解できない姉妹にとって、このへ妊娠が一般的なおめでたきことなのだということを提示する存在でもある。姉妹に両親がいないことは、へ妊娠をうまく理解できないという姉妹の精神的要因の背景になっているのだから、姉の高校生の頃から続いているへ精神的な病気もそこに原因があるのかもしれないが、へつわりが精神的な要素が大きく影響することを考えれば、姉のへつわりのひどさはそのへ精神的な病気に起因しているとも言える。また、義兄が姉と一緒に食欲をなくすのはクヴァード症候群の症状である、というように一見奇妙なこととして描かれているようなことも医学的に説明がつくのである。

(21) 小川洋子作品の特徴としてへ不透明で濃密なもの、生命力溢れるエネルギーに対する嫌悪感・違和感(与那覇恵子「ひそやかな」ものへの親和」『週刊読書人』91・4・15)があ

ることが指摘されている。「完璧な病室」(「海燕」89・3)、
「シュガータイム」など、食に〈嫌悪・違和感〉を感じるあ
り方は小川作品の中に多く探すことができるが、「妊娠カレ
ンダー」ではそれが生殖(妊娠)と結びつけられているので
ある。

(22) 前掲秋山駿書評

(23) 『現代産科婦人科学大系 第17巻A 〈妊娠異常 妊娠中毒症〉』
中山書店、74・2

(24) 「個別的なるものの氾濫」(「海燕」91・6)

(25) 小西聖子「母と娘の鎖 ある子殺しの症例における妊娠の意
味」(「Image 特集Ⅱ子宮感覚」92・9)

(26) 筑摩書房、94・6・25

(27) 前掲「週刊ポスト」書評中の小川洋子の発言。

(28) ゼミ発表での反応や、出講している大学の学生の反応、また
レポートを見ても、男性に限らず女性にも作品を読んでこの
ような感想を持つものが多い。